



---

## 2024 年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

**学会賞**：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

**奨励賞**：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

**功労賞**：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

**『日本語教育』論文賞**：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

**学会活動貢献賞**：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られます。

### 各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2024年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

---

# 2024年度 日本語教育学会 学会賞

受賞者 よこみぞ しんいちろう  
横溝 紳一郎 氏

## 【授賞理由】

横溝紳一郎氏は、ハワイ大学大学院にて博士の学位を取得され、広島大学大学院教育学研究科、佐賀大学全学教育機構、西南女学院大学人文学部等での勤務を経て、現在は西南学院大学外国語学部外国語学科教授として、教育、研究活動に携わっていらっしゃいます。

横溝氏は日本語教育学に関わる学術研究活動において多大な業績を残されています。特に、近年の著書や研究としては、共著『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』（くろしお出版、2019年）、単著『日本語教師教育学』（くろしお出版、2021年）、「Community Language Learning の理論に基づく教師活動」（『西南学院大学外国語学論集』第3巻（1））、「持続可能な教師の成長」（『Journal CAJLE』第23号、2022年）、坂本正氏との監修『今すぐ役立つ！日本語授業教案の作り方』（アルク、2024年）等が挙げられます。また、個人や共同での研究プロジェクトも精力的に取り組んでおり、研究代表者としては「熟達英語教員が見出す中高と大学の英語教育の実践知の共通性と差異性」（2019-2023年度、科学研究費基盤研究（C））、研究分担者としては「ICT活用による授業の質向上および業務の効率化を目指した教員研修プログラムの開発」（2017-2019年度、科学研究費基盤研究（C））、「理論と実践の往還を通じた越境的学びによる日本語教師養成プログラムの開発と検証」（2022年度-、科学研究費基盤研究（B））等の研究プロジェクトが挙げられ、日本語教育学に関する学術研究活動の推進に大きな貢献をしています。さらに、横溝氏は、英語教育学に関する研究成果も挙げられており、日本語、英語を中心とした外国語教育学の充実、発展にも多大な貢献をされています。

横溝氏は、所属機関での教育研究活動の他にも、九州日本語教育連絡協議会事務局長（2007年-2013年）、日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク副代表（2010年-）といった要職を務められ、九州地区を中心に日本語教育の社会的認知の向上にも取り組まれてきました。日本国内や海外での日本語教師養成、教師教育に関する講演や研修も行っており、近年では長崎での日本語教師研修会「あなたにとっての日本語教師教育とは一己を省み、他者と関わり、自らの成長へ」（2024年）、オランダ日本語教師会研修会での「やってみよう、授業改善！—持続可能な教師の成長をめざして—」（2025年）等を実施し、日本や海外の日本語教育の発展に資する活動に積極的に関わっておられます。横溝氏の包容力のある人柄や日本語教育に対する情熱、高度な専門性に裏打ちされた理論と豊富な実践経験から数多くの日本語教育関係者が薫陶を受け、世界中の現場で活躍しています。

これまでの学術研究、教育実践、社会的活動での顕著な活躍を称え、今後のさらなる活躍に期待し、横溝氏に日本語教育学会学会賞を贈ります。

以上

---

# 2024年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 やまもと さえり  
山本 冴里 氏

## 【授賞理由】

山本冴里氏は、国内外での日本語教育の経験を経て、2012年に早稲田大学日本語教育研究科博士課程を修了されました。山口大学留学生センター講師を経て、現在は、山口大学国際総合科学部で 准教授を務められています。日本語教育・複言語教育を専門とし、日本語教育に関わる幅広い活動を展開されてきました。

博士論文『戦後の国家と日本語教育』（くろしお出版、2014）では、戦後の国家政策の中で、日本語教育に期待された役割について、国会議事録からその歴史を明らかにしています。また、欧州評議会言語政策局『言語の多様性から複言語教育へーヨーロッパ言語教育政策策定ガイドー』の翻訳書（くろしお出版、2016）は、複言語主義を紹介するもので当領域の基礎資料です。このように、山本氏は、必要性が高いにもかかわらず若い研究者の注目が集まりにくいと思われる日本語教育政策・言語教育政策関連の領域に注目してきました。最近では、『世界中で言葉のかげらをー日本語教師の旅と記憶ー』（筑摩書房、2023年）を、2022年には、編著書『複数の言語で生きて死ぬ』（くろしお出版、2022年）を上梓しました。ともに日本語教育がその視野の中に捉えておかねばならない複言語複文化的ないしは多言語多文化的な世界の状況を鋭い感性と柔軟な筆力で掴み取ろうとした労作です。

論文や報告については、日本語教育学会の学会誌『日本語教育』146号に「文部省「教育白書」（1953-2000）における日本語教育の扱い」が、同149号に「国会における日本語教育関係議論のアクターと論点ー国会会議録の計量テキスト分析からの概観ー」が掲載されました。他に、『言語政策』、『言語文化教育研究』、『複言語・多言語教育研究』ならびに『仏蘭西学研究』、『フランス日本語教育』“CROISEMENT”などにも、単著、共著により日本語やフランス語で論文を発表され、研究活動の範囲を広げています。学会発表においては、2018年に日本言語政策学会から発表賞（一般発表部門）が授与されました。

ヨーロッパなど諸外国における学会発表、本学会においても口頭発表やパネル発表などを行い、山口大学で教鞭を取る傍ら山口県下の地域日本語教育の展開にも尽力されています。研究活動、教育実践活動、社会的活動の多方面にわたる様々な活動と実績を称えるとともに、大きく変貌を遂げようとしている日本語教育界において、研ぎ澄まされた感性とユニークな視点でさらなる活動が展開されることを期待し、日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

---

# 2024年度 日本語教育学会 功労賞

受賞者 ほりい けいこ  
堀井 恵子 氏

## 【授賞理由】

堀井恵子氏は、1989年より日本語教育に携わり、今日に至るまで教育現場において日本語教育の教育実践に向き合いながら、多大な研究成果を残されています。また、日本語教育学の関連組織において重要な立場で多大な貢献をされてきました。

「アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会」においては、会の立ち上げから今日まで長年にわたり組織を牽引してこられ、現在のアカデミック・ジャパニーズ研究の基礎を築かれました。また「ビジネス日本語研究会」においても、現在まで継続して中心的役割を担われており、ビジネス日本語教育研究の展開において数々の重要な提言を残されています。これら二つの研究分野の黎明期を支え基盤を築かれたことは、その後の日本語教育における両分野の研究や教育の発展へとつながっています。

堀井氏は教育現場に直接関わる学術的活動に加え、2004年には日本語 OPI 研究会会長、2007年からは経済産業省委託事業の委員など日本語教育に関連する研究会や委員会での要職も務められてきました。近年では「アジア人材還流学会」の副会長として活動され、アジアと日本における外国人材の雇用と定着について日本国内外の関係者がともに議論する場を提供されています。

また、武蔵野大学グローバル学部及び大学院言語文化研究科において、長年に渡り多くの研究業績を残しつつ、後進の研究者の育成にも尽力されてきました。それら教育研究活動の成果は、単著『日本語教育への扉 改訂版』（凡人社、2011年）、監修『BJT ビジネス日本語能力テスト スコアアップ模擬テスト』（アルク、2007年）、門倉正美ほか編著『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』（ひつじ書房、2006年）など、日本語教材や一般書として刊行され、広く教育現場に還元されています。

日本語教育の学術分野としての発展と新たな教育実践の開発と普及という堀井氏のこれまでの大いなる功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

---

# 2024年度『日本語教育』論文賞受賞論文

## 理系教員が持つ留学生教育観の構造

### —留学生プログラムを運営する理系教員の葛藤—

掲載号：『日本語教育』187号（2024年4月発行），pp. 74-89

執筆者：阿久澤 弘陽 氏（京都大学）・河内 彩香 氏（同）・佐々木 幸喜 氏（同）・河合 淳子 氏（同）

#### 【授賞理由】

本論文では、英語を教育言語とするの留学生プログラムに携わる理系教員にインタビューを行い、同教員の経験にもとづく留学生教育観と教育現場の現状を明らかにしている。近年、高等教育の留学生受入の現場で、専門教育と日本語教育との協働が増えつつあるが、それぞれの立場によって留学生を指導する教員の意識に違いがあるのも事実である。漠然とした課題認識はあったものの長年放置されてきたこの問題について、M-GTA という手法を用いて可視化し、一つのモデルとして提示しようとした本研究の取り組みは高い評価に値するものである。

#### (1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

本研究は大規模国立大学で留学生教育に携わっている教員を対象とした調査であるが、分析結果の示し方が明確で、課題の抽出と改善点の指摘も具体的であり、小・中規模大学における留学生教育の現場にも有用な示唆をもたらすと評価できる。さらに、大学での学際的研究が推奨される中で、専門教員との協働による国際共修の環境づくりに取り組んでいる日本語教員にも貴重な参考となる論考である。

#### (2) 新しいテーマにチャレンジしている。

日本語教育と専門教育との接続については、これまでも日本語教育研究において扱われてきており、M-GTA も目新しい手法ではない。ところが、本研究では、日本語教育の専門家でない立場から留学生プログラムを設計、運営する指導者に質的調査を行い、彼らの教育観と実態の構造をモデル化したことで、現場への波及と汎用の可能性を示唆しているところに新しさがあると評価できる。

#### (3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

大学の国際化が叫ばれる中、高等教育における日本語教育には、高度人材育成のためのキャリア教育、地域定着のための多文化共生教育など、言語教育の枠を超えた領域との連携、協働が必須となってきている。本研究は、理系専門教員の事例に留まらず、そうした他領域との協働の取組一般の研究においても貴重なリソースとなりえる。

以上

---

## 受賞論文 要旨

理系教員が持つ留学生教育観の構造

—留学生プログラムを運営する理系教員の葛藤—

近年、大学での日本語教育と専門教育の円滑な接続や日本語教員と専門教員の協働が重視されるようになり、専門教員の留学生教育観を知る重要性が高まっている。本稿では、留学生プログラムの設計・運営に携わった経験がある大規模大学の理系教員の留学生教育観を明らかにすべくインタビュー調査を行った。その結果、上記教員が、留学生プログラムが大学の国際環境構築や留学生の日本社会への定着、知日派の育成に必須であると認識していること、その一方で、専門分野の学問は英語で遂行可能なのに対し学部教育は日本語という使用言語に関する板挟み、優秀な留学生の獲得において日本という学問環境の相対的な魅力不足や日本人学生との入り口の違いによる知識技能の違い等の複数の課題を認識しており、そうした課題の解決や支援体制の構築に腐心していることを明らかにした。その上で、大学日本語教育の位置づけと日本語教員と専門教員の協力体制について論じた。

【キーワード】 専門教員, 留学生教育観, 英語シフト, M-GTA, 葛藤

### **The Structure of Science Subject-Specific Professors' Perspectives on International Student Education: Conflicting Demands on Science Professors in Managing an International Student Program**

AKUZAWA Koyo, KAWACHI Ayaka, SASAKI Yuki and KAWAI Junko

In recent years, it has become increasingly important to bridge Japanese language and specialized education in universities smoothly, along with enhancing instructor collaboration, which underscores the need to understand subject-specific professors' perspectives on international student education. An interview survey with science professors at a large university who have experience in managing international student programs revealed their recognition of the programs' crucial role in fostering a global university environment and aiding international student integration. They also acknowledge challenges, including the conflict between using English for specialized fields and Japanese for undergraduate courses, Japan's relatively limited appeal in attracting top international students, and the disparities in academic knowledge and skills due to differences in admission methods between Japanese and international students. The study not only reveals their efforts to address these issues and establish a support system, but also, based on these findings, discusses the role of Japanese language education and faculty collaboration in universities.

【Keywords】 subject-specific professors, perspectives on international student education, shift to English, M-GTA, conflicting demands

(AKUZAWA, KAWACHI, SASAKI, KAWAI: Kyoto University)

---

# 2024年度『日本語教育』論文賞受賞論文

日本語学習者の文構造の複雑さに関する数量的研究

—JASのストーリーライティングの場合—

掲載号：『日本語教育』187号（2024年4月発行）、pp. 166-181

執筆者：李 り ぶん へい 文平氏（上海財経大学）・劉 りゅう かい どう 海濤氏（浙江大学）

## 【授賞理由】

本論文は学習者の文構造の複雑さが横への拡がりや埋め込みの両方向においてどのように変化するかを解明するために、300本のストーリーライティングのデータを数量的に分析したものである。本論文の試みは、日本語学習者のライティングの習得状況をより精密に把握し、ライティングに関する効果的な指導のための有効な指標を提供している。また、学習者が産出する文構造の複雑さについて、新たな尺度から明らかにしており、従来のリーダビリティ研究を一步進めていることも高く評価できる。

### (1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

依存距離と文構造特性値の指標を用いることで、文単位指標では反映されてこなかった文構造の複雑さをより精緻に把握することができる。また、学習者が産出した文構造の複雑さだけでなく、教室で使用される教材における文章の複雑さを検討する際にも有効性を発揮することが期待される。これらの指標により、読解資料や聴解資料における横への拡がりや埋め込みの難易度の測定、ならびに学習者の文構造化能力の評価や測定など、日本語教育現場に資する応用可能性が具体的に示されている。

### (2) 新しいテーマにチャレンジしている。

学習評価のあり方が問われる昨今において、習得状況をさまざまな方法で測ることは重要不可欠であり、教育者からも学習者からも求められている。そのような状況の中、文構造の複雑さを測るために平均文長以外の新たな指標を示した点には新規性が感じられる。また、文構造の複雑さに対して、並列構造だけでなく、階層構造を数量化して可視化を試みており、新しいテーマにチャレンジした研究だと言える。

### (3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

本論文の分析で用いられた依存距離と文構造特性値は、読解や聴解のようなまとまったテキストが持つ語彙や文長以外の難易度の指標にもなり得る。学習者の発話や作文データを分析することで、産出における文構造化能力の測定指標としての応用も期待される。また、本論文の成果は日本語母語話者が産出する文構造の複雑さを分析する指標ともなり、「やさしい日本語」の進展やAIによる言語産出の分析などにも貢献する可能性がある。

以上

---

## 受賞論文 要旨

### 日本語学習者の文構造の複雑さに関する数量的研究

#### —I-JAS のストーリーライティングの場合—

本研究は日本語能力の上昇とともに、学習者の文構造の複雑さが横への拡がりや埋め込みの両方向においてどのように変化するかを解明するために、300本のストーリーライティングを対象に依存距離と文構造特性値を用いて文構造の複雑さに関する特徴を数量的に分析したものである。その結果、次の3点が明らかになった。第一に、「1文当たりのT-unitの数」と「1T-unit当たりの節数」に比べて、依存距離と文構造特性値が文構造の横への拡がりや埋め込みの複雑さをより精緻に測定することができるという点である。第二に、日本語能力が高まるにつれ、横への拡がりや埋め込みはともに複雑になるが、N5-N4とN3-N2段階に比べて、N2-N1段階における複雑さの変化量が小さくなる点である。第三に、異なる熟達度レベルの間において、埋め込みの変化がより顕著だという点である。本研究の結果は、学習者の習得状況の把握、リーダビリティツールの開発などに貢献するものと考えられる。

【キーワード】 文構造, 横への拡がり, 埋め込み, 依存距離, 文構造特性値

### Quantitative Study on the Complexity in Sentence Structures of Japanese Language Learners: An Analysis of I-JAS Story Writings

LI Wenping and LIU Haitao

This study quantitatively analyzed features related to the complexity of Japanese language learners' sentence structures in both horizontal expansion and vertical embedding as their proficiency improves. The analysis examined 300 story writings from the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS), using the metrics of dependency distance and sentence structure characteristic value to quantify how complexity changes. There are three main findings. First, in comparison to T-units per sentence and clauses per T-unit, dependency distance and sentence structure characteristic value more precisely measure complexity of sentence structures in both horizontal expansion and vertical embedding. Second, as Japanese proficiency increased from N5 to the highest N1 level, both horizontal and vertical complexity also increased. However, the magnitude of complexity change for the N2-N1 stage was smaller than for the N5-N4 and N3-N2 stages. Third, the study highlights that the difference in vertical complexity is particularly pronounced among learners at different proficiency levels. The findings of this study should contribute to the understanding of learners' proficiency and to the development of readability tools.

【Keywords】 sentence structure, horizontal expansion, vertical embedding, dependency distance, sentence structure characteristic value

(LI: Shanghai University of Finance and Economics, LIU: Zhejiang University)



---

# 2024年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

## 受賞者一覧 (50音順)

### 【授賞対象】

2024年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった個人会員の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

しまづ ももよ  
嶋津 百代 氏

はすぬま あきこ  
蓮沼 昭子 氏

むらおか たかこ  
村岡 貴子 氏

以上